

僕がいない世界で君が光を見つけるまで

あの日から、私は身体の半分をなくしてしまっただみたい。
君のいない世界では、うまく息ができない。

Scene 1 モノクロの世界で、ただひとつの色

「一花、聞いてる?」

少し棘を含んだ声が耳に突き刺さって、慌てて意識を戻す。茜が不満げな顔で私を見ていた。

あの日から、私の世界は濁って見える。

耳も膜が張ったみたいにクリアな音が入ってこない。だからこうしてワntenボ選れることが増えた。

そうだ。今は四人でお昼ご飯を食べている時間。しつかりしないと。

「ごめんごめん！ ちょっとぼーっとしてた」

「最近そういうの多くない？ なんかあった?」

茜の隣に座る真帆が同調すると、雛乃も私をじつと見る。

「実は……」

もったいぶって間をためる。

と見せかけて頭をフル回転して言い訳を探す。

「中間テストの結果が悪すぎて！ 親にお小遣い下げられたんだよねー。もう最悪。なんとかしてお金死守しないと！ もうすぐ発売日なのに！」

明るく笑うと、場の空気がほどける。

「そーだよ、発売日あとちょっとだよー」

「どうするの？ 予約できた?」

「な、なんとか一枚だけは死守しました……!」

茜の試すような口調に、私はふざけて返す。

発売日、というのは共通の好きなアイドル・エクリップスのCD発売日。

「一枚だけー? 私、今回二十枚買う」

「すご」

「絶対ハイタッチ会当てたいからね」

「じゃあ私も追加しようかな」

張り切った表情の茜に、真帆も前のめりになる。

「このためにバイト増やした。ね、一花はバイトできないの? バイトしてないのー花だけじゃん」

「実はカテキョつけられちゃったんだ、成績悪すぎて！ 週三だよ、最悪」

「うわー」

「申し訳ないっ！ 私には一枚が限界でした。もつと買いたかったよー！」
すらすらと嘘が続く。

家庭教師なんて嘘で、そもそも私は何枚も買いたくないだけ。

「雛乃は？」

「私もバイト増やそっかなあ」

雛乃の控えめな答えに茜は満足したように頷くと、私を見てにやりと口端を上げる。

「一花にも悩みとかあったんだね」

「お金と成績についてはいつも悩んでいますよ。おかげで夜しか眠れませーん」

「つまんない」

茜が笑うと、続けて真帆と雛乃も笑う。つまんなくても、笑い飛ばしてもらえたならよかった。

私は味のしないパンを無理やり口に押し込んでから、笑顔を返す。

「梅雨と同じく、私の心はずぶずぶ雨模様ですよー」

「なにそれなんかの歌詞？」

「作詞作曲、水谷みずたに一花」

「あはは」

窓の外を見つめる。激しく雨に打たれる窓。梅雨はまだ続くのだろうか。

梅雨が始まる前に終わった中間テストの結果は散々だった。

だけど私の心が晴れないのはもつと前から。

あの日から、ぼんやりとしたモノクロの世界を生きている。

*

ただいま、誰もいない玄関で呟く。

キッチンまで進むと、学校帰りに買ったスーパリーの袋を置く。冷蔵庫に中身をしまつてからベランダに干している洗濯物を取り込んだ。

放課後はバイトをしている時間はない。家事があるし、成績が下がったのは本当だから勉強しないと。

「……成績よくなくてもいいんだけどね」

シャツを畳みながら独り言が漏れる。

成績が下がったからどうなるんだろう。

このままでは希望の大学に行けないとか、就職先もないかもしれないとか、どうだつてよかった。

未来どころか、一年先のことすら見えない。
今を生きることに必死。

……ううん、今をなんとか過ごすだけ、生かされているだけ。
洗濯物を畳み終え、スマホの通知に気づいた。

【一週間後は、あなたの誕生日です！】

一週間後の六月二十五日は私の十七歳の誕生日。それから――

【一週間後は、瀬里^{せり}さんの誕生日です！】
並ぶ通知。

ポケットにスマホを乱暴に突っ込むと、自分の部屋に直行してベッドにダイブした。
なにも考えたくない。

次に気づいたときには部屋は暗かった。

どうやらそのまま眠ってしまっていたらしい。最近夜あまり眠れていないから、日中に眠くなる。

廊下から音が聞こえてお父さんが帰ってきたのだと知る。

スマホを見ると夜の九時だった。慌てて部屋を出ると、靴を脱いでいるお父さんと目が合った。

「おかえり！」

「ただいま」

「ご、ごめん、今までずっと寝ちゃってて！ まだご飯作れてない。今日、レトルトでもいい？」

「それはいいけど、どうした？ なにかあった？」

「ううん、全然なんにも。今日体育だったんだけど、体育館蒸し暑くて。熱中症なるかと思った。でも寝たから身体回復してるー」

「……そうか」

「もう回復しておりますっ！」

あくまで身体が疲れただけなんです、というアピールのために大げさに力こぶを作るポーズを見せた。

「夜ご飯、冷凍うどんにレトルトで、カレーうどんでもいい？ 私さっさと作っちゃうし、お父さんお風呂洗ってきてほしい」

明るい早口を続け、お父さんの視線をすり抜けてキッチンに向かう。

冷凍うどんをレンジに突っ込む。

レンジの窓に映った自分の平凡な顔立ち。顔は青白く、セミロングの髪が顔に張り付いている。

大丈夫、私は大丈夫。
自分に言い聞かせてから、温まったうどんを取り出した。

*

——一花って悩みなさそうだよね。

誰かが私を評するときの台詞ナンバーワン。
気楽そう。

明るい。

いじられキャラ。

そういう評価を集めたのが私、水谷一花。

クラスが変わればグループは変わるけれど、毎年大体そういうポジションに収まる。
自分がそうなりたかったわけではない。

無言が続いたときになにかしゃべらなくては、と思う。

誰かがいじられるくらいなら、自分で笑ってもらおうと思う。

みんなに笑ってもらうために、無理やりテンションを上げる。

そうしているうちに、明るくて気楽で悩みなんでない水谷一花が出来上がった。

円滑にグループで過ごすためには必要なこと。

求められている役割をこなす。

私は、そんないいやつでもないし、本当は明るくもないし、いじられたいわけでもない、それにテンションだって本当は低い方。

演じた通りのあっけらかんとした性格ならよかったのに、本当は細かいことを気にしてしまふ。毎夜、一日を振り返っては自分の些細な言動が気になって、反省会を開いてしまふほど。

しゃべりすぎてしまったかな。一言余計だったかな。

盛り上げたつもりですべていたらどうしよう。すべるのはいいけどどうざくないかな。

聞き役に徹したらもう少し気楽だろうか。そう思うのに翌日には、場を盛り上げようと口が勝手に開いてしまふ。

いつも溺れているみたい。

もがけばもがくほど苦しいのに、それでも必死に演じるのをやめられない。

そんな私が唯一、気負うことなく素のままでいられるのは、幼馴染の風見瀬里の前だけだった。

瀬里の前なら大げさに笑わなくてもいい。

はしゃいでみせたり、いやなことでも喜んだりしないでいい。道化を演じなくてもいい。

本来のテンションでいられて、なんでも思ったことを口に出せる唯一の人。

瀬里とは物心つく前から一緒にいた。

父親同士が同じ会社の同期入社で仲がよく、勤める会社が借り上げたファミリーマンションにお互い住んでいた。

同じころに子供が生まれることはわかっていたが、実際に生まれたのは、まさかまったく同じ日。

自然と家族ぐるみの付き合いが増え、私も瀬里も兄弟がいなくてもあり親しくなった。私のお母さんが小学生のころに亡くなってからは瀬里の家で過ごすことも多く、兄妹のように育った。

私にとって家族で、一番の友達で、大好きな人。

それは高校二年生の今になっても変わらない。

私の半分を占める人。

—— だけど四月の終わりに、突然この世からいなくなってしまった。
突然の事故であっけなく。

お別れする間もなく。

私の日常から切り取られてしまった。

私の世界の半分は瀬里だったのに。

瀬里がいなくなったこの世界は霧がかかっている、温度がない。音も不明瞭で、夢みたいに現実味がない。

私はふらりふらりとただ食べて、眠って、一日を繰り返している。

君のいない世界はうまく息継ぎができない。

*

夕食を終えると、お父さんが気まずそうに一枚の封筒を渡した。

「やったー、ありがとう！ 今月の映画はなにかなー」

私はお父さんの表情に気づかないふりをして、封筒を受け取る。

封筒の中身は映画の無料試写券。お父さんの会社はマスコミ関係で、毎月映画のチケットが一枚もらえる。

同じ会社で働く瀬里のお父さんも同じものをもらうから、毎月一度、一緒に映画館に行く。それが私と瀬里の恒例行事だった。

「一応渡したけど、その……なんだ。無理なくてもいいんだよ」
「わあこれ観たかったやつなんだよね。ありがと、時間あるときに行ってくる！」
封筒の中身を確認して、笑みを浮かべる。居心地の悪い視線から逃れるために、食器を下げにキッチンに向かう。

「私は宿題するから先にお風呂入っていいよ」

「わかった」

「早めに入ってよ。お父さん最近すぐソファで寝落ちするんだからね」

それだけ言うと私は自分の部屋に戻った。

瀬里のお通夜でも、お葬式でも、今日にいたるまで一粒も涙をこぼしていない私をお父さんが心配しているのは明白だった。

だれど別に心配しなくても大丈夫。お母さんがいなくなったのに、お父さんを残して私までいなくなるわけない。

お父さんからもらった映画のチケットを見つめる。

知らない映画だった。

最近の映画の情報を集めていないから、新作を知らない。

今までは瀬里と「今月はどの映画のチケットがもらえるか」を当てるゲームをやっていたなあ……

今は、どうしても瀬里を連想させる映画を避けている。

私たちは毎月映画に行くだけでなく、映画そのものが好きだった。

瀬里はちよっとおしゃれな洋画が好きで、私は少しマイナーな邦画が好き。

放課後、土日。どちらかの家で映画を見るのが私たちの日常だった。

動画配信サブスクリプションは入ったまま。瀬里がいなくなってから映画を見る気はない。

私は動画配信アプリを開いて、エクリプスの動画を見ることにした。

九人のメンバーが数人ずつに分かれてグルメを堪能するVlogで、ふうふうと冷ましながらラーメンをすすっている。

おいしそうだな、とは思いう。

だけど食べたいと思わない。

あの日からなにを食べても味がしない。

必要だから、食べているだけ。

メンバーが食レポをしているけれど、耳にうまく入ってこない。

水の中で聞こえる音のように濁っていて、音として届かない。

私はテレビを消すと、布団にあおむけに転がった。

六月二十五日。水曜日。私と瀬里の誕生日。
少し早めに終わった梅雨、カラッと晴れた初夏の空。うんざりするほど日が眩しい、
なんの変哲もない日。

お父さんは「一花の誕生日なのに接待が入ってしまった」と申し訳なさそうな顔で
謝ってきたけど、瀬里のことを知っている人とお祝いするのはなんだかいやだったか
らちよどい。

お祝いしよう！ と茜たちに言われたら断る理由もない。放課後、カラオケで誕生
日特典のケーキを食べて、たくさん歌って大笑いした。

無理にでも笑みを浮かべていたら、瀬里のことを考えなくて済む。ばかみたいにハ
イテンションで歌って騒ぐ。みんなの歌声はキイキイと音を立ててノイズになり、音
楽として耳に届かない。

瀬里を失ってからずっとそう。

それでも無理に笑っていれば、日常を進めることはできる。

茜たちと別れた帰り道、コンビニでケーキを買う。瀬里はチョコが好きだったから、
ガトーショコラ。

毎年誕生日を瀬里と祝ってきた。

家族みんなで祝ったこともあるし、二人だけで映画を見ながらコンビニのケーキを

食べた日もあった。

生まれて初めての瀬里がいない六月二十五日。

今日だけは瀬里を思う時間がほしい。

「ただいま」

ローファーを脱ぎながら、今日も誰もいない家に向かって眩いた、はずだった。

「おかえりー」

気の抜けた声がリビングから聞こえて、身体がびくりと固まる。

お父さんは飲み会のはず。誰……？

——ううん、私が聞き間違うはずがない。今の声は……

「……瀬里……!?!」

慌てて顔を上げるけど、廊下は当然がらんとしていた。

「幻聴か……瀬里の声なんてするわけないよね」

自嘲気味に眩いたところで、廊下の先にあるリビングの扉が開いた。

「え？」

なにか影が見える。

どきり、と心臓が音を立てる。

このシルエットはお父さんじゃない。

全身に緊張が走り、逃げたいのに身体は固まってぴくりとも動かない。

「え？」

相手も驚いたような声を出した。

「……瀬里」

ついに私は幻覚も見えるようになった？

——目の前に立っているのは、紛れもなく瀬里。

瀬里の高校の制服を着て、まっすぐ立っている。張りのある艶やかな黒髪に、私より二十センチ高い身長。

驚いたように見開く目も、ぽかんと開いた口も、私のよく知っている瀬里そのまま。

「え？ もしかして、俺のこと見えてる？」

「み、見えてるよ……。どういう、こと。えっ、本当に瀬里？」

私は脱ぎかけのローファーを投げ捨てて廊下を走った。足がもつれるけれど、必死で動かして彼のもとにたどり着く。

瀬里は驚いた表情のまま、私を見下ろす。近くで見ても、やっぱり瀬里だ。

あの日からずっと濁った世界にいる。

だけど目の前にいる瀬里は妙にクリアに見えた。

どこからどう見ても瀬里だ。瀬里がここにいる。

「え、は？ 生き返った？」

「いや、たぶん俺、幽霊」

「はあ……」

「映画みたいなことあるんだな」

瀬里は表情を緩めると気楽に笑った。昨日も会っていたみたいに、普通の会話みたいに。

「えと……透けて、ない。足もある」

「そうみたいだな」

私は瀬里を確かめたくて手を伸ばす。だけど私の手のひらは、彼の身体をすり抜けて瀬里の後ろの扉に着地した。

瀬里はそれを見て興味深そうに頷く。

「ほお。俺のことが見えてる人間でも触れられないのか。ここは幽霊っぽいな」

「な、なに。どういうこと」

瀬里の言っている意味がわからない。

これは私に都合のいい夢？

もう一度見上げると、瀬里はちよつと困ったような笑みを浮かべていた。

「見えて」

瀬里はくるりと後ろを向くとリビングの扉を開けた。
「物は触れるみたいなんだよな。だからこの通り、扉も開けられる。だけど」
瀬里は私の肩に手を伸ばした。

——触れられた感触はない。

「物には触れられるけど人は触れられないらしい。なんだろうな、これ」

「な、なんで。そんな当たり前みたいに……受け入れて。私はまったく意味が」
声が震える。

瀬里に会いたいと何度思ったかわからない。

だけど現実味がまったくなくて、嬉しいのに涙も出てこなくて、ただただ意味がわからなくて、頭は真っ白。

「実は三日前くらいから、この世界に戻ってきたっぽいんだよな。だからちょっと冷静かも」

「瀬里が冷静すぎて、私はまったくついていけない」

「ここで立ち話っていうのもな。リビングか、一花の部屋でも行く？」

返事ができないでいる私を見て、瀬里はリビングに進んだ。悩みつつ、私も瀬里のあとをついていく。

瀬里は我が家のようにリラックスした様子でソファに座った。私はなんとなく瀬里

から距離を取って、床に座る。

「警戒してる？ 祟^{たた}ったりしないけど？ 俺たぶん悪霊ではないよ」

「そういうわけじゃない。でも、ほんとに混乱してる」

「さっきも言った通り。三日前からこの世界に戻ってきたっぽい。俺、死んだんだな」

瀬里は他人事のように言った。

死んだ——その言葉を肯定できずにいると、瀬里は返事がないことを察して話を続けた。

「それで数日ふらふらしてたけど、今日俺たちの誕生日だし。一花の顔でも見ようかなと思っただけ」

「ほ、本当に瀬里なんだよね」

「うん。なにか証明しようか？ たとえば俺たちが最後に見た映画とか？ 主演の俳優は——」

「いい。瀬里なら、それでいい」

私はそう言うのがやっと思った。

言葉にして、ようやくわじわとお腹からなかがせり上がってくる。安堵のような焦りのような、こみあげてくるものが熱くて私は口を手で覆った。

瀬里がここにいる。

瀬里はソファから立ち上がると、私のもとに歩いてきてかがんだ。

同じ高さの視線になってきちんと目が合う。

斜めにわけられた前髪から見える少し切れ長の涼やかな瞳。その温度が優しく胸の奥が静かに痛んだ。

「突然死んでごめん」

「……なんで謝るの」

「俺がいなくて、一花大丈夫かって」

「全然大丈夫じゃない。成仏せずにここにいる。悪霊でいいから」

私の声は嘆願するように震えていて、ろれつが回っていないみたいだった。

「ははは。いや、俺は成仏したいよ」

瀬里は声をあげて笑った。

なんでそんなにいつも通りなの？ 全部なかったみたい。

「……………」

「一花に一つお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「そう。俺、事故で突然死んじゃったから。心の準備もなく。だからみんなにお礼と

お別れがしたい」

瀬里は真剣な表情だった。

誰にでも優しく、みんなから慕われている瀬里らしいお願い。

ああ本当に瀬里なんだな、と思う。

「俺の姿が見えるの、たぶん一花だけだから。俺の言葉を代弁してほしい」

「私が？」

「うん。それに実は心残りもあって。それも一緒に解消してほしい。頼む、一生のお願い」

瀬里は手を合わせてから、がばっと頭を下げた。

「そんな一生のお願い卑怯だよ」

「それもわかっている。でも一花にしか頼めないから」

瀬里が成仏するための手伝いなんていや。だけど、こんなお願いを断れるわけがない。

「……………うん、わかった」

だって毎日後悔していたから。

瀬里のためになにかもつとしてあげたらよかったって。

もう一度話せたなら、なんでもするって。

了承すると、瀬里は顔を上げ白い歯を見せて笑った。ほっとしたような笑みに、私は唇をかみしめる。

そうでもしないと、叫び出しそうになったから。

会えた喜びと、これまでの苦しみと悲しさと、ごちゃ混ぜになったいろんなものが全部溢れてしまっそう。

「それってもしかして俺のために買ってきてくれた？」

瀬里の視線の先にはガトーショコラが入ったコンビニの袋。

「……うん、そう」

「やっぱな。じゃあ二人で祝いますか」

私はチョコが嫌い。

それを瀬里は知っている。

瀬里はキッチンに移動して手慣れた様子でパントリーからロウソクとライターを取り出した。余ったロウソクが入っている場所も知っている。

目の前の人が瀬里である証拠がまたひとつ増えて、泣きたくなる。

瀬里はダイニングテーブルに座ると、コンビニのケーキに小さなオレンジ色のロウソクを刺した。私も瀬里の前に座る。

友達の誕生日祝いならバースデーソングを歌って盛り上げるけど、瀬里との誕生日

はいつもケーキを食べて映画を見るくらいだった。

それに瀬里は十七歳を迎えることができなかった。祝う、と言ってもどうしたらいいのかな。

「ははっ、珍しく一花が気遣ってる！ 火くらいつけとくか」

瀬里はライターでロウソクに火をつけた。小さな火がゆらゆらと揺れる。

電気がついたままの部屋でコンビニの小さなケーキ。

ムードもなく質素なお祝い。

でも、ここに瀬里がいてくれる。私の胸にも熱が灯る。

「十七歳おめでとう、一花」

十七歳になることができなかった瀬里が言う。

「瀬里も」

私はおめでとうとは言えなかった。

「これは俺のケーキなので」

瀬里がふうと息を吹いて、火が消える。

「あーくそー。俺のケーキなのに食えない！」

瀬里はおどけた口調で、うらめしそうにケーキを見た。

「なんで？ 食べていいよ」

「食べものは身体が受け付けられないみたいで。触れはするんだけど、食べられないっていうのがわかる。飲み物も。喉が渴かないし、腹も減らない。こういうところは幽霊っぽいよな」

瀬里はからからと笑うけど、私の心はずんと沈む。

なんでそんなに現状を受け入れてるの。幽霊っぽいなんて自分で言うの。

文句を言いたくなるけど、言ってもどうにもならない虚しさが唇を動かさない。

「だから代わりに一花が食べて」

瀬里はガトーショコラを一口分、フォークで切り分けた。

「チョコケーキ好きじゃないんだけど」

「一花が食べたら、俺も食べた気がするから」

「わかった」

仕方なく口を開いて、一口食べる。

しっとりとして甘くて、ほろ苦い。

そう感じたことに驚いた。久しぶりに食べ物の味がする。

「……おいしい」

「だろ。食わず嫌いなんだって」

その笑顔を見てチョコレートが喉に詰まりそうで、慌ててグラスの水を飲み干した。

「あー。俺も食べたい。目の前にあるのに食べられないなんてひどいよなあ。せっかく戻ってこられたなら、うまいものドカ食いしたかった。——そうそう。一応幽霊やるにもルールみたいなものがあるらしい」

「ルール？」

瀬里はできること、できないことを教えてくれた。

- ・ 私以外の人には見えない、聞こえない。瀬里は家族や学校の友達にも、それから町ゆくいろんな人に姿を見せてみたけど、誰も気づいてくれなかった。

- ・ 建物をすり抜けたら、空を飛んだり、瞬間移動できたり、そういった超人的なことはできない。普通の人間と同じ。

- ・ 物には触れられて、動かせる。ただし人間や生き物には触れられない。

- ・ ずっとこの世に留まってはられない。誰かに説明を受けたわけじゃないけどわかる。

「ポルターガイストがちよっとわかった気がする。あれ、多分ほんとにいるんだよ。物は動かせるから、俺みたいなやつが引き起こしてる」

瀬里がそう笑ったところには、私もようやくこの状況を受け入れ始めていた。まだ現実味はない。

「ただ、瀬里がここにいて会話ができる。」

「これが夢だっていい。」

瀬里がいてくれるなら。

身体が温かくなつたせいとか、いろんなところがゆるむ。何度口元を押さえたかわからない。

「三日前に戻ってたの？ ずっとどこにいたの？」

「自分ち。気づいたら自分の部屋にいた」

「三日前からこのマンションにいたの？ もっと早く来てくれたらよかつたのに」

「俺もちよっと信じられなくて、一日目はひきこもってた」

「ひきこもるって」

緊張感のない言葉に思わず笑いが漏れる。

幽霊がひきこもるってなんだ。

「親も俺のこと気づいてないし。ひとまず一日は家の中にいて、考えを整理してた。」

次の日からは一花の学校とか俺の学校行ってみただけ」

「ええ、学校に来てたの？ 気づかなかつた！ ……それで普通に家に帰ったの？」

「そう。幽霊っていつでも夜普通に寝てたな。ほんとに生きてるときと同じ。ああでも、食べられないし、暑いとかそういうのもわかんないな」

「そうなんだ」

なにも食べられずなにも感じず、人から認識されないというのは、生きているといえるのか、と少し考えてしまつてやめた。

「誕生日だし一花を祝おうと思つて家に来たら……鍵開いてた。気をつけろよ」

「気をつけます……」

朝、鍵をかけるのを忘れてしまったらしい。最近どうも気が散漫だ。一日開けつぱなしかつた不用心さに苦笑いが漏れる。

「それで一花へのお願いが二つある」

瀬里の長い指がピースサインを作る。

「まずひとつ目。一花、俺んちの合鍵持つてただろ。あれ貸して」

「ふふ、そつか。鍵ないと家入れないもんね、今までどうしてたの？」

「一日目はひきこもってた。二日目は母さんが家に入るタイミングでなんとか入つた。今日は帰れてなくて困つてる」

「あはは、いいよ」

私はキッチンの近くにある棚に向かった。引き出しから瀬里の家の鍵を取り出す。テーブルに戻り、瀬里の手のひらの上に鍵を落とす。私たちは触れ合えないのに、物を受け渡すことができるのは不思議な感じだ。

「ほんと助かる。これで野宿の心配なく外出ができる」

「野宿の心配する幽霊、あはは」

「笑えるだろ？ でも、一花が笑っててよかった」

瀬里に優しい目で見つめられる。

——瀬里の前でも笑えているならよかった。

「うん。私はなんとかやってるよ」

「昨日こっそり一花の学校行っただし知ってる」

「うそ。見たの？ こわい」

「はは」

昨日はどんな一日を送っていた？

昨日の記憶はぼんやりとして思い出せない。

でも大丈夫。学校生活を見られていたなら、瀬里に心配かけない程度に明るくやれているはず。

「それで、もうひとつのお願いは？ 代弁するんだよね？ おじさんおばさんに？」

「うーん、親にはちょっと心の準備がいるな」

瀬里が初めて寂しそうに目を伏せた。

私の脳裏に蘇るのはお葬式で憔悴しきった瀬里の両親の姿。

あれから私も二人と会話ができていない。彼らのためにも瀬里のためにも話をした方がいいと思う。

「気持ちの準備ができたなら、一花に協力してもらおうかな」

「二人とも喜ぶと思う」

「うん」

「あとは友達とか？」

幼稚園から中学まで瀬里と一緒にいたけれど、いつだって瀬里は人気者だった。

みんなから好かれていて、いなくなったことを悲しんでいる人や瀬里に会いたがっている人は数え切れないほどいる。

「うん、でも全員は無理かな。基本的には信じてもらえないだろうし」

「それは……そうだね」

私は姿が見えているけど、他の人には見えない。私の頭がおかしくなったと心配されるかもしれない。

「でも絶対に話したいやつらがいる」

「わかった。私も知ってる人？」

私は瀬里の友達の顔を何人か思い浮かべた。

「いや、知らない。高校の友達だから」

幼いころからずっと一緒だった私たちだけど、通う高校は違う。

「映画同好会のメンバー」

「そういえばそんな同好会に入ってたね」

瀬里は週に一度帰宅が遅かった。映画同好会はほぼ帰宅部みたいなもので、週に一度だけ映画を見るために集まっていると聞いたことがあった。

「あいつらは絶対信じてくれるから。心残りもそこにある」

瀬里は表情を引き締めてそう告げた。

翌日の木曜日。

放課後、私は緊張しながら校門に向かった。

瀬里と学校で待ち合わせなんて初めて。

私たちが会うのは基本的には家で、どこか出かけるにもマンションのエントランスで待ち合わせていた。

校門で他校の生徒が待っている光景を見ては、誰かの恋人なんだろうなあとうらやましい気持ちになった。

瀬里と恋人になるなんて考えたことはなかったけれど。

校門付近にはたくさん生徒がいる。紺色のズボンやスカートの中に、一人だけグレーのズボンを穿いた男子生徒がいた。

私の世界で、瀬里だけが鮮やかに見える。

背が高く、遠くから見ても目立つ。

瀬里はいつだって人の目を引いて、すれ違う人が振り返るくらいだった。顔立ちが整っていてスタイルもいいから、モデルだと思う人もいたのかもしれない。

だけど今日は誰も瀬里の方を見ることなく通り過ぎていく。

瀬里を認識していないけど、うまくよけて通っているの、無意識になにか感じ取っているのかもしれない。

「瀬里」

もう二度と呼べないと思っていた名前を呼ぶ。

振り向いた瀬里はぱっと笑顔になり、その眩しさに胸の内側が詰まる。

「一昨日ぶりの一花の学校」

「そういえば来てたって言ってたよね。そのときは気づかなかった」

「一花の前に立つのびびって、隠れてこっそり見てた」
私が小さく笑うと、通り過ぎる男子生徒が私をまじまじと見た。

「……そうだ、瀬里はまわりから見えないんだった」

小声で呟くと、瀬里は大きな声で笑った。大きな笑い声に誰も気づかない。

「イヤホン耳につけとけば？ 通話してると思われるかも」

「そうする」

「行きますか」

瀬里が楽しげに歩き出す。

足はある、浮いてもない。事故が夢だったんじゃないかと思うほど、その足取りはしっかりしていた。

瀬里の隣に並ぶと、彼の歩幅が小さくなる。歩く速度を合わせてくれる優しさに頬が緩む。

「一花の駅からだと一回乗り換えがいるんだよな」

「あ、うん。そうだったね」

思考を頭の隅に追いやって、返事をする。今日の私には大事な目的があるんだから。そう、瀬里の高校で、映画同好会のメンバー三人に会うこと。

午前中に瀬里の高校に電話をして、同好会のメンバーを集めてもらった。毎週木曜

日が同好会の集まる日らしく、今日なら全員都合がつかずだと瀬里が言っていた。

「先生ちよっと戸惑ってたよ」

電話に出た先生の、怪訝な声を思い出す。

「なんて言って集めてもらったの？」

「瀬里の遺品を預かっているから渡したって」

「さすが。コミュ力高い」

「表向きはね。それで一応ブルーレイディスク持ってきたけど、大丈夫かな」

瀬里は好きな映画は手元に揃えたいタイプで、私の部屋にも瀬里のブルーレイディスクがいくつか残っていた。

「大丈夫大丈夫！ そんなことしなくても、俺自身が遺品のようなもんだから」

瀬里は笑うけど不安しかない。瀬里と親しい人といっても、私は初対面で、彼らの名前しか知らないんだから。

瀬里が幽霊として戻ってきました、なんて言って信じてもらえるかな。

学校を出て三十分。

瀬里の通う吉倉高校よしくらにたどり着いた。県内で一番の進学校で、私はとても目指せなかった高校。

白いシャツにグレーのポトムスの生徒たちの帰宅の波に逆らって、校内に入った。

職員室で許可証をもらい校舎に入る。

私の高校とさほど変わりはないように見えるけど、ここは私の知らない瀬里の世界でなんだかかむずむずする。

私の紺色のスカートは目立つようで、誰だろうと注目を集めている。この中に瀬里の友人もいるのかもしれない。

瀬里は無言で校内を歩いていた。瀬里にとって大事な人に会うから、緊張しているのかも。

西の校舎三階の端にある空き教室が同好会の活動場所。

瀬里に案内された教室の前に立つ。中に人の気配を感じるから、同好会の三人はもう集まっているはず。

深呼吸すると、隣で瀬里も大きく息を吐いた。

小さくノックすると「はあい」と元気な声が出た。それから小走りで見寄ってくる音が聞こえて、扉が開く。

「こ、こんにちは」

「こんにちは。水谷さんかな？ どうぞ、入って！」

扉を開けた男子生徒に好意的な笑顔で迎え入れられる。

瀬里と同じくらいの長身で、栗色の短髪。親しみやすい目と大きな口、明るく

て活発な雰囲気。

彼にうながされて入ったそこは、ごく普通の教室に見えた。

よくよく部屋を見回すと、吊り下げ式のスクリーンや、後ろの棚にプロジェクターらしきものがある。

ここで瀬里は映画を見ていたんだ。

私の知らない瀬里の場所。

教室内には男子が二人と女子が一人。

隣にいる瀬里を見ると、三人をにこにこ見つめている。

——彼らが、瀬里の大切な友人。

「連絡くれてありがとう。俺は石垣雄大^{いしがきゆうだい}。こっちは天野瑛介^{あまのえいすけ}、こっちは間宮留那^{まみやるな}」

「雄大、スポーツマンっぽくない？ でも運動より勉強が得意で、実は学年で一番成績がいい」

瀬里が小さな声で説明をつけたした。言われてみると石垣くんは活発さやリーダーシップから運動部の部長っぽさがある。

石垣くんが隣にいる男子生徒の肩を叩くと、彼はべこりと頭を下げた。

「こ、こんにちは……天野瑛介です」

天野くんは何度も瞬きする。丸いつぶらな瞳にえくぼ、少しふくよかな体型や色白

さから柔らかな印象を受ける。

「瑛介は見たまんまめっちゃ優しい。でもスプラッタとか、B級映画が好きなんだ」
 瀬里の追加説明に内心驚く。血みどろ系が好きとは想像がつかなかった。

「問宮留那です」

唯一の女子生徒が私の顔を見ずに言った。ゆるくウェーブした茶色の髪。ぱっちりとした瞳に小さな鼻と唇。こんな人形みたいに可愛い子が瀬里の近くにいたんだと思うと、少しだけちくりと胸を刺すものがある。

「はじめまして！ 私は水谷一花です。瀬里の幼馴染で——」

「瀬里の遺品ってなんですか？」

私の挨拶を問宮さんの冷たい声（トーン）が遮った。

「留那はちょっと感じ悪く思えるかもだけど、根はいい子だから」

瀬里がフォローするが、問宮さんはどう考えても私を警戒している。

「これ瀬里が好きだった映画なんです。皆さんにお渡しできれば、と思って……」

私は慌ててカバンの中からブルーレイディスクを取り出した。

水面が印象的なパッケージで『青の向こう』という瀬里のお気に入りの邦画。三人も瀬里の好みを知っているのか、パッケージを見ると納得したような表情を見せた。

石垣くん（トーン）にそれを渡し、問宮さんが覗き込む。

「これだけですか？」

ブルーレイディスクから顔を上げ、問宮さんは納得できないという表情になる。

やっぱりそう思うよね。

わざわざ学校に連絡してまで渡したい遺品というのだから、通販でいつでも誰でも買えるようなものだと肩透かし感はある。

「えへへ、そう思いますよね。それだけじゃなくて……こつちが本題というか、瀬里からメッセージがあった」

「メッセージ？」

問宮さんの目がさらに鋭くなり、他の二人も私にじつと注目する。

なんて切り出そう……

昨日から何度も考えてはいたけれど『瀬里が幽霊としてこの場にいるからメッセージを伝えたい』というのは到底信じられるものではない。

男子ふたりはともかく、問宮さんは警戒心を隠そうとしない。信じてもらえるかな……

「話したらわかってくれる」

瀬里が呑気にグーサインを私に向けるけど、変な話を切り出すのは私なんだからね。

「今から話すことは驚かせちゃうかも。でも本当だから聞いてほしいんです」

私の前置きに三人はますます怪訝な表情になる。

「私の隣に瀬里がいます」

私の言葉に合わせて、瀬里が三人に向かって手を振る。

誰も瀬里は見えないようで、私の言葉に反応はない。意味がわからないことを言われると人は動作が停止するみたいだ。

「ええと、それはもちろん幽霊として、なんだけど。それで私の隣にいる瀬里がみんなにメッセージがあるということ、私が代弁しよう——」

「あんた、なに言ってるかわかってんの!？」

間宮さんが叫んだ。

目にはみえるうちに涙が溜まり、顔は真っ赤になっている。

「ばかにしてきたの!? からかっているの? なに!？」

「る、留那、落ち着いて」

天野くんが間宮さんをなだめるけど、彼女は涙の溜まった目で私を睨む。

「さいつてー……」

どうしよう。すぐに受け入れてもらえないとは思っていたけど、ここまで拒絶されるとは思っていなかった。

瀬里も予想外だったようで目を見開いた。

「ごめんね、水谷さん」

石垣くんが一步前に出た。口調は穏やかだけど、表情は険しい。

「水谷さんのことは瀬里から聞いてて、二人の関係は深かったことも知ってるけど……こういう冗談はごめん、俺もいや。励ましてくれてるんだろうけど、俺たちもまだ気持ちの整理がなくて、受け入れられない」

ぴしゃりとした言葉に、天野くんが泣きそうな顔をした。

「ゆ、雄大……水谷さん、もしかして……」

すぐに石垣くんははっとした顔つきに変わる。私のメンタルを気にしてくれているのだとわかる。

「そうか……どうしよう」

「二人とも気を遣わなくていいよ、私たちのこと、からかいにきたんでしよう!」

間宮さんがとがった声で言い放つ。

初対面の人にここまで怒られたことは初めてで身がすくむ。

だけど、怒りはまっとうだ。

私も同じことをされたら怒っていたかもしれない。それほど彼女にとって、瀬里は大切な人だった。

どうしよう。瀬里のことを信じてもらえないわけがない。

『ラストチャイム』

混乱のさなか、瀬里が呟いた。

「え？」

「言ってみて。俺たちが撮ってるショート動画のタイトルだから」

ショート動画？ それがなにを指すかはわからないけど、言われた通りにする。

『ラストチャイム』のショート動画を撮ろうとしていましたか？ 瀬里が今そう言いましたー！」

私は必死に声をあげる。

間宮さんの大きく見開いた瞳から涙が一粒こぼれた。

「う、うん……そうだよ」

天野くんが動揺しながら、石垣くんを見上げる。

「水谷さんも映画が好きだって瀬里が言ってた。知ってただけかも」

「うん、『ラストチャイム』は知ってる映画だよ。でも、同好会の内容は聞いたことなかったの。ショート動画を撮るっていう意味もわかってないくらい」

「まだからかうつもり？ もういい加減にしてよ！ そういうの、本当に逆効果、しんどいんだよ……！」

「水谷さん、ごめん。留那もこう言ってるし」

石垣くんはいい人だけど、現実主義なのかもしれない。私の言葉を信じていないのがわかる。

私は困り果てて瀬里を見上げる。

「瀬里、今日は無理かも。出直す？」

「ちょっと待ってて」

瀬里は部屋の隅にあるホワイトボードまで移動すると、ペンを手に取った。

そうだ、物には触れられるって言っていた。

瀬里がホワイトボードに大きく『風見瀬里』と自分の名前を書く。

「え……」

私の視線に気づいた石垣くんが、ホワイトボードを見て声を漏らした。

「おっ！ 雄大が気づいた、気づいた」

瀬里は嬉しそうな顔をして、ホワイトボードに『おーい、雄大！』と付け加える。

「ほ、本当に瀬里なの……？」

震えた声の天野くんもホワイトボードを見た。続いて瀬里が『瑛介！』とペンを走らせる。

隣の間宮さんが大きく震えた。『留那、泣くなー』という文字を見て、へなへなとへたりこむ。

全員がホワイトボードを凝視している。

「今！ これ、瀬里が書いてるんです。私はなんにもしていませんから！」

私は大声でアピールするけれど、石垣くんは険しい表情のまま。

「あの、瀬里が言っています。みんなにお礼とか、なんにも言えなかったから、ただ会いたくて来ただけなんです。本当に。だから怖がらないでほしいって」

「私が瀬里を怖がるわけじゃないじゃん。悪霊だつていいんだよ、崇られたつていい！」
問宮さんがホワイトボードに駆け寄ろうとするが、石垣くんが制した。

「でも、瀬里じゃなかったら？ 俺だつて瀬里ならいいよ。でも……」

「瀬里じゃない悪霊とかもあるってこと……?」

天野くんが怯えた目をホワイトボードに向ける。

「俺だつて、瀬里だつて！」

瀬里が声を張り上げて反論するけれど、みんなには聞こえない。

「本当に瀬里だつて言うなら……。瀬里しか知らないことがある。俺の姉はなんていう名前で何科を目指している？」

石垣くんの言葉に場は静まり返った。

問宮さんと天野くんも顔を見合わせ、知らないと言いつけている。

「瀬里、わかる?」

私が聞くと、瀬里はぼりぼりと頬をかいて考え込む。

「えー……俺、雄大のお姉ちゃんなんて知らないけど……」

「ええ、どうするの。クイズに答えないと信じてもらえないよ」

「そう言われても雄大の兄しか知らないからな。ちなみに、名前は和臣わのおみで脳外科目指してる」

「……瀬里がお姉さんは知らないって言ってる。お兄さんが和臣で、脳外科つて」
答えると石垣くんははっと息を呑んだ。すぐに涙が浮かんで、それがぼたりと落ちる。

「ねえ、どういうこと雄大。合ってるの!? そこにいるのは瀬里なの!?」
問宮さんが石垣くんの身体を大きく揺さぶった。石垣くんの声は言葉にならず、彼は

何度か頷いて涙をこぼした。

「瀬里……! 瀬里がいるんだね、本当に!? 瀬里、なんて言ってる? 留那だよ!」

問宮さんが教室中を見渡しながら叫んだ。

「あの瀬里、ここにいます。この机の上に座ってます」

「……う、うわあああ……」

大人しそうに見えた天野くんが大きな声をあげた。ぼたぼたと涙が溢れてくる。

三人が号泣するのを瀬里が微笑んで見ていて、私の胸もぎゅっと掴まれたみたい

痛い。

だけど……瀬里は泣かないんだな。

*

三人の涙が落ち着いたころ、石垣くんが気まずそうに話を切り出した。

「水谷さん、ごめん。疑ったりして。それからありがとう」

「普通信じられないよね！ 私も昨日驚きまくったんだ。だから気にしないで！」

明るく返すと、石垣くんと天野くんはほっとしたような笑みを浮かべた。

間宮さんはそわそわと机を見ている。そこに瀬里がいる、と説明してからずっと見ている。瀬里も机から移動しなかった。

「水谷さんは瀬里に言われてここに来てくれたんだよね？」

「うん。みんなにお別れもお礼も言えなかったから伝えてほしいって。それで瀬里のこと見える私がお願いされたの」

「じゃあこうやって何人も周っていくの？」

天野くんが驚いたようにこちらを見る。きつと心優しい彼は、私が何度もこのように目に遭うと予想したのだろう。

「ううん。瀬里がいることを信じてくれそうな人だけ。みんなが天野くんたちみたいに信じてくれないと思うから」

「そっか……瀬里が……」

「瀬里は私たちを選んでくれたんだ。……ねえ、瀬里はなんて言ってるの？ 私たちに伝えたいことってなに!？」

間宮さんに必死に問われて、瀬里を見上げる。

「まずは信じてくれてありがとう！ 信じてくれるって思ってた！」

瀬里の言葉を代弁すると、また三人の目に涙が浮かぶ。涙腺は一回ゆるむと止まらないみたい。

「急にこんなことになってごめん。俺、しばらくこっちにいられる猶予があるみたいなんだ。そこでひとつお願いがある」

「どうやら瀬里は私以外にもお願いをするらしい。瀬里の言った内容を伝えると、三人は深く頷いた。

「四人で撮ってたショート動画。途中だったから、けっこう心残りで！ どうせ俺がいなくなったからやめただろ？ 最後まで撮りたい」

きつと、さっき名前が出ていた『ラストチャイム』のことだろう。

「四人で撮ってた動画があるんですよね？ それが心残りみたい。最後まで撮りた

いって」

「……本当に瀬里なんだね」

「どうせ今から撮るなら俺も参加したくて！　ここにいる一花も撮影に交せてほしい！」

「ええっ」

瀬里から心残りの内容を聞いていなかった私は驚いて声をあげた。

でも、そうか。私がないと瀬里と三人は意思疎通がはかれない。

不思議そうな顔をしている三人に伝える。

「瀬里がどうせ撮るなら自分も参加したいから、私も参加させて意思疎通をはかりたいって。……どうかな？」

「もちろんだよ！」

「水谷さんは大丈夫なの？」

石垣くんは即答して、天野くんは私を気遣ってくれた。

「全然平気！　私帰宅部だし、バイトもしてないからいつでも大丈夫！」

満面の笑みを作る。間宮さんは少し顔をしかめたけどなにも言わなかった。瀬里のお願いは断れないのだろう。

本当は知らない人と動画を撮るなんて気乗りしない。でも瀬里の心残りだと聞くと

なんでもしてあげたくなる。

「俺たちも動画は完成させたいと思ってたんだ。それが瀬里の希望ならなおさら」

石垣くんは目を伏せた。きっと彼らも私と同じことを思っていたはず。もっと、瀬里のためになにかしてあげられたら、と。

「ところで動画ってどんなの？　映画とか？　全然そういうのわかんないから映像制作はお役に立てないと思うけど、瀬里の通訳がんばりますっ！」

間宮さんに笑いかけると、目をそらされた。

「大丈夫だよ。映像制作なんて大きなことじゃなくて、一分程度のショート動画を作ろうとだけ。一から作るわけでもないよ。好きな映画のイメージ動画……ワンシーンを再現する感じかな」

「映画を作るわけじゃないんだね」

「そうそう。実はこの同好会、廃部の危機で。部員を五人まで増やすか、活動成果を提出しないと教室を貸し出せないって言われてたんだ。そこでショート動画を作ることにした。同好会のSNSアカウントも取得して、ここに動画を投稿していいこうと思ってたわけ」

石垣くんがスマホを見せてくれた。ショート動画を投稿する動画アプリで、まだひとつも投稿されていないアカウントが表示された。

「だけど瀬里がいなくなつて。正直俺たちここで集まるのもつらくなつてたから、もういいかなつて思つてたんだ。集まつたのも今日が久しぶり」

石垣くんの顔が曇り言葉が途切れる。天野くんと間宮さんもうつつむいた。「そんなことだろうと思つた」

三人を見つめる瀬里の瞳に、悲しみが宿つていた。

「……でも瀬里のために動画を作ろうと思う。瑛介と留那はどう？」

「僕は、瀬里のためにできることがあるなら、なんでもしたいよ……」

「私だつて、やるよ」

三人がしっかりと頷くのを見て瀬里は笑つた。本当に嬉しそうで、この表情を三人にも見せてあげたいと思つた。

*

「お疲れ、ありがとな」

校門を抜けたところで瀬里が言つた。学校から出て、私も肩の力が抜ける。

「はああ、どうなることかと思つたよ。ちよつと危なかつた」

「でも信じてくれただろ」

「あやういとこだつたよ」

「一花のコミュ力なら大丈夫だと思つて」

「無理してるの知つてるでしょ」

「さすが一花さま！ ありがとうございます！」

瀬里がおどけて手を合わせてくるから、思わず笑つてしまう。

「まあいいよ。でもほんと緊張した」

あれから次の約束を取り付けて、いったん解散となつた。

石垣くんが「今日からすぐつていうのはちよつと難しい。心の整理もいるし」と言つたから。

三人の目は真っ赤に腫れていたし、部外者の私がある場にも違う気がして先に帰ることにした。心の整理が必要なのは間違いない。

同好会は毎週木曜日に集まつていて、それ以外の曜日は各々予定があるらしく、翌週木曜日に集まることになつた。

「ラストチャイム」を撮るんだよね」

二年前に瀬里と映画館で観た邦画。吹奏楽部をテーマにした青春ドラマだつた。

「うん。吹奏楽部に頼んでいくつか撮つてた」

「へえ、けっこう本格的」

立ち読みサンプル はここまで